View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

京都府立大学学術報告（人文）第69号　（2017年12月）

ロバート・バートン
『憂鬱の解剖』
第3部 第1章 第1節 第1項 – 第2節 第2項

岡　村　眞紀子
伊　藤　博　明　　訳

第3部
愛の憂鬱症

第1章 第1節

第1項

序。

この愛の憂鬱症に関する論については、あれこれ批判のある箇所もあるであろう。愛の症状を述べるのは「神聖なものに対してあまりに軽薄、あまりに滑稽」（エラスムス『痴愚神礼讃』「トマス・モア卿への序論」）、あまりに空想的で、多情な詩人や、恋に溺れやすい多感な若い色男、宮廷優男、そういった漫然と暮らしている男に向いているといった反論があると思われる。反論する者たちによれば、人間の邪悪さゆえに、「**愛という言葉は、純潔な耳には信ずるに足らず唾棄すべきもの**」（コサン［『聖なる雄弁と人の雄弁との比較』8. 14「情愛について」］）になったのである。またそれゆえ、大げさに重大さを気取って、愛という名のつくものすべてを、一語も読まぬうちから嫌悪する者もいる。ペトロニウスには、本心を偽って、耳がそのような淫らな言葉で穢されたと怒ってみせた結果、厳粛な哲学者で真面目な態度だと褒められる人物が登場する〈『サテュリコン』85〉。本論への反論者たちには、愛の戯事も、愛の語らいも、**表情でも態度でも目つきでも**外に現われるものは何もかもが厭わしく、そのような考えに至っては、それにもまして悪いものはないとまでは言わないにしても、悪いというより問題外である。

ルクレティアは顔を赤らめ、私の本を脇に置いた、
ただ、ブルータスがいたから。彼が場を外せば、また手に取った。
［マルティアリス〈『エピグラム集』〉11. 16. 9-10］

しかし、これら口やかましい偽カトーたちには教えよう、かのイタリアのグアッツォ［の「市民の会話」4］でも、主人ジョヴァンニが宴の女王に応えているように、歳を重ねた、真面目で思慮深い男が愛を語るにふさわしい、そういう男こそ多くの経験を積み、多くを見、落ち着いた判断をし、よく理解し、決断を下し、議論し、助言や良き警告を与え、確とした教訓を授けて、愛について聞くものに良き情報を与えることができ、それに齢熟している分、そのような話題に執着しないものだからと。のみならず、**この愛という言葉に恐れるべきものは何もない**。そこに避けるべきものは何もなく、愛こそ憂鬱症の一種であり、私のこの論に必要な事項である。ゆえに私は愛をこの論から外すことはできない。「**いったん取りかかった仕事は、為し続けるべきであった**」と、ヤコブ・モルツァも、ルキアノス対話篇の翻訳において、自戒を込めて言っているが、私も同感である。私は自分の仕事を成し遂げねばならないし、そうするつもりである。メルシエがアリスタエネトス『書簡集』において述べた言訳を借用すれば、「たとえ、私がこの執筆に時間を徒に要したとしても、読者には滞りなく読んでいただきたい」。しかし、私は時間を徒に費やしたのではないと信じ、このテーマを論じたことに何の弁解もしないし、後悔したりもしない。プラトン、プルタルコス、プロティノス、テュロスのマクシモス、アルキノス、アヴィケンナ、レオーネ・エブレオ（『愛の対話』全3巻）、クセノポン（『饗宴』）テオプラストス（アテナイオスの『食卓の賢人たち』第13巻第9章によればであるが）など、多くの立派な学者たちが、このテーマで丸々一冊かけて著書を書き上げているではないか。その他に、イタリア人のピーコ・デッラ・ミランドラとマリオ・エクイコラ、コルンマン（『愛の糸』第3巻）、ピエール・ゴドフロワ（〈『愛についての対話篇』〉全3巻）、ピエトロ・カプレット、それにヴィラ・ノーヴァのアルナルドス、ヴルリオーラ（『医学典範』2.7）、エリアーニョ・モンタルト、デュ・ローランといった医者たちが、こぞってその憂鬱症論で論じているし、また、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ（『脳の病』、バラスコン・ドゥ・タラント、ド・ゴルドン、エルコレ・サッソーニア、サヴォナローラ、ランゲなどもそれぞれに、その著の中で扱っている。というわけで、私も、ピエール・ゴドフロワ、フランソワ・ヴルリオーラ、フィチーノと同意見であるが、ランゲの言葉を借りて、事訳をしておく。ミレトスのカドモスは14巻からなる愛の書で「若き青年たちのために、この愛という主題で書簡を書いて、何を恥じることがあろうか」と書いた［『医学書簡』1.24］。厳格な読者諸子は、『アエネイス』の第2巻を嫌い、ウェルギリウスの荘重さが、英雄叙事詩の主題に恋愛の激しい感情をもち込んでいることを非難した。しかし、ウェルギリウスの注解者セルウィウスは、この詩人の、このように書くことの価値、賢明さ、思慮深さを擁護した［『アエネイス註解』2］。シャティオンは若者に『雅歌』を読ませたくなかった。彼が思うに、その古い英語の翻訳での一篇などはあまりに軽く扇情的な歌だったからである。シャティオンは、ヤコブとラケルの恋愛、シケムとデナやユダとタマルの物語などゆえに、『創世記』を読むことをもまた、禁じた方がいいと考えていた。さらにまたイスラエルの民たちのモアブ人たちとの邪淫ゆえに『民数記』を拒絶し、サムソンとデリラの性的な抱擁ゆえに『士師記』を、ダビデとバテシバの密通、アンモンとタマルの近親相姦ゆえに『列王紀』などを拒否した。エスタ、ユディト、スザンナ、

その他多くの物語もまた然り。ディカエアルコスなどは、プラトンがそういったくだらぬ愛を綴った、なかでもアガトンとの愛の戯れは最たるものと、彼の権威のあら捜しをした。

アガトンに幾度も接吻づけながら、我はといえば魂を唇にこめていた、
やつれ果て心急いて、魂は我から離れ行かんとしていたのだから。

その人自身立派なプラトン主義者であるテュロスのマクシモスは、私と同意見で、プラトンもソクラテスもともに、あのような軽々しく官能的なことを書いたという理由で、ホメロスを彼らの理想国から排除している、と「**読んで驚きもするが、ただただ驚嘆して立ち尽くしてもいる**」[『説教集』8] と述べている。「**ホメロスが、ユピテルと愛を交わさせるべく、ユノーを晴れることのない雲に覆われたイダの山に連れてきたゆえに**」とか、ウルカヌスが神々の面前でマルスとウェヌスを網に捕えて醜行を曝した（『オデュッセイア』8. 266ff.）、あるいはアポロンがアキレウスに悩まされたとき逃げた（『イリアス』21. 590ff.）とか、神々が負傷し泣き声をあげて走り去り、ステントールよりも大きな声で喚くマルスが倒れたときの声は9エーカにもわたって響き渡ったとか、ウルカヌスは、ある夏の日、天から落ちてレムノス島で脚を折ったとか等々、そういった馬鹿げた話を書いたゆえにホメロスを拒絶したことに驚いているのである。ソクラテスやプラトン自身すら、いっそう軽薄なものを書いていると、テュロスのマクシモスは言い、「**恋する男と節度ある男との距離は、美を愛でる男と気狂いとの距離ほどかけ離れている**」とも言っている。厳粛な哲学者がこのような愚かしいことを扱ったり、アウトリュコスやアルキビアデスを美貌ゆえに称讃したり、麗しのパイドロスや優美なアガトン、若きリュシス、魅惑のカルミデスの後を追ったり、見つめたり、愛呆けするなんて、**こんなことが厳格な哲学者にふさわしいだろうか**と。ひょっとしてカリアス、トラシュマコス、ポロス、アリストパネス、あるいはその他のプラトンの論敵やライヴァルが反対するかもしれない。もっと手厳しい敵、アニュトスやメリトスは、プラトンを、クリティアスに教えを授けて暴君的な振る舞いをさせたとか、犬やただの木に誓いを立てたとて不信心だとか、また詭弁を弄したとかいった理由で、譴責した。しかし、彼らは、不純な愛を主題に書いたり語ったりしたからとて、その愛を理由に厳しく咎めだてしたりはしていない。それゆえに、テュロスのマクシモスが結論づけているように、疑うべくもなく、ソクラテスもプラトンも、その点においては許されて然るべきなのである。それにしても、そういったことが少しばかり目に留まったからと言って、神聖なるプラトンが貶められていいものだろうか。否、むしろカトーの痛飲癖について語っているように、カトーが酔っぱらったからとて、飲酒が悪癖ということにはならない。彼らはプラトンを責めるが、それは謂われなきことである。フィチーノが弁護するように、「愛はいずれも誠実で善きものであり、愛を善きものと語る者は愛されて然るべきだから」。この愛という素晴らしい感情を語るに際して、「私の議論には、広範な哲学的領域があり、それによれば、恋する者はすべからく狂気に至る」と、ヴルリオーラは言う。「この哲学的領域に歩を進め、我らがムーサの楽しき森をよくよく見つめ、さらに深遠な熟

考を重ねよう。そこではえも言われぬ種々の花で己のために花冠を作り、わが身を飾るのみならず、その芳しき香と花蜜で我らが魂を養い、心の知識欲をも満たすことができる」[『医学典範』1.7]。憂鬱症の難儀で苦痛な議論で、ここまで読者諸子に我慢を強い、著者の私も疲れたが、その労多き考察からの恢復のために、後は法律家ゴドフロワ［『愛についての対話篇』1. 序］や「非常に多くの厳粛な神学者や立派な人たちが、自らの意思で、自らのため他者のために、然るべき書き方で、憂鬱症について書き、咎められることもなかったのだから」(〈『視覚疾病、憂鬱症、カタル、老齢等に関する対話論議』〉5) と言うデュ・ローランともども、私にもお許しをいただこう。司教ヘリオドロスがテアギネスとカリクレアの恋物語を書き、同時代のカトーたちに非難されたとき、その書を棄てるぐらいならと司教職を棄てたと、ニケフォロスが伝えている［『教会史』12. 4.]。昔気質の神学者で、齢は四十を超えていた、後の教皇ピウス2世、エネア・シルヴィオ・ピッコローミニは、エウリュアロスとルクレティアの官能的な物語を書いたと白状している[〈『書簡集』〉序]。学問の師でありながら軽い馬鹿げた主題で物を書いた人は、何人でも数え挙げることができる。たとえば、ベロアルド、エラスムス、それにアレマンなどは24回もスペイン語その他で出版された。というわけで、私も沈思黙考をしばし休め、読者諸子もお疲れでしょう、「恋愛沙汰をいささか心愉しく貶して、面白くもない議論に味付けを施す」［アッキウス］ために、フォンセカの言う**この悦ばしい分野**の話をさせていただこう。〈ゲッリウスがグナエウス・マティウスから引用して〉誘うように「**些少なことで人生を甘美にし、心煩いを〈舵取りするのは〉いいことであり**」、プリニウスが言うように「**我ら学徒の多くは愉悦を求めるものである**」〈『博物誌』序〉。尤も、マクロビウスは、「かの古の賢者たちは、そのような軽薄な論を、彼らの学問からは消し去り、ただ耳に心地よいだけのものとして、乳母の揺り籠へと渡した」[『スキピオの夢』〈1. 2. 8〉] と、異なった風に諭す。しかし、私は、アプレイウスの言葉を借りて、尊敬すべき先達ソロン、プラトン、クセノポン、ハドリアヌス等も同意見であったように、そういった論を大いに容認する、と反論しよう。また一方、そもそもそういった論は忌避されるべきではなく、不適切でもないと私は思うのである。ある書物の中の登場人物が言うように、「**それに魅了されない者は不幸であるような甘美な物語を語ろう**」［ピエトロ・アレティーノ『ナンナとアントニアの話』］と私は言明する。「**耳を傾ければためになり、喜んで記憶したことが有益であるようなことを言いはしまい**」とベロアルドがプロペルティウスへの注釈の中で言ったが、確信をもって同感である。リプシウスがエピクテトスに寄せた賛同を私は求めも望みもしない。「**何でも、一旦すると、さらにしてしまい、いつも新たなるものを繰り返したら、また新たなるものが繰り返されねばならなくなる**」。自分の小論を強制しているのでも、それへの注意を求めているのでもないが、読みたければ読んでくれればいい。プリニウスは**書き物の厳粛さを愉快なことで味付けするのは**正しいことであり、きわめて適切なことだと考え、シュネシオスも「**玩具でただ遊んですごしてもいい**」と認めている。詩人［ホラティウス］もそれを称えて次のように言っている。

楽しみと有益性とを一つにする者は、あらゆる称讃を手にした。

［ホラティウス〈『詩論』343〉］

そして、問うまでもなく、浅薄なものを私が書こうというよりも、むしろそれを読みたがっている者たちが存在している［ルキアノス］ものである。「もし私があなたの議論を聞くよりも、劇を見たいということがあるならば」、私を生きさせないで欲しい、とアレティーノの〈『宮廷人たちの対話』の〉アントニアが述べている。しかし、疑いなく、彼女と同じ意見の者たちはかつて多数いたし、これからも多数いるだろう。そのことは、ヒエロニムスが私に証しているとおりである。「プラトンよりもアプレイウスを読んだ者がはるかに多かった」［『イザヤ書註解』〈12.41〉］。キケロは自ら、プラトンの『ティマイオス』は理解できなかったので、それには気を留めなかったと告白している。一方、生徒たちはすべて、グルンニウス・コロコッタ・ポルケッルスの有名な遺言を知り尽くしている。あの滑稽詩人［テレンティウス］は

自らに与えられた唯一の仕事は、
民衆に気に入られる物語を創作することと信じていた。
〈『アンドロス島の女』序文 2-3〉

しかし、私が心底から意図しているのは、楽しませることというよりも、むしろ益することである。「**私は、民衆に気に入られるよりも、むしろ民衆の役に立ちたい**」。そして、私が望んでいるのは、私のこの書物が、金色に輝く丸薬のごとく、欲求を巧みにそそるように作成され、そして味覚を騙すことにより、身体全体を助けて、それに医学的に働きかけることであり、私の文章が精神に気晴らしを与えるだけではなく、またそれを矯正することである。私はこれで十分に語ったと思っているが、もしそうでなければ、私とは異なる見解の持ち主の者には、アプレイウスのことを想い起こしていただこう。アウソニウスが彼を弁護しているように、「彼は人生においては哲学者であり、彼のエピグラムにおいては恋多き者であり、彼の戒律においてはきわめて厳格であり、彼のカエレリア宛の書簡においては淫奔であった」。アンニアヌス、スルピキウス、エウェヌス、メナンドロス、そして加えて、多くの古代の詩人たちは、**書物においては淫奔であり**、フェスケニア詩〈ローマの婚礼で歌われた卑猥な歌〉、アテッラ笑劇〈ローマ民衆の粗野なユーモアに満ちた劇〉、数々の好色な歌、**愉快な事柄**を作成した。しかし彼らは、**品行においては厳格さと真面目さ**を保っていたのであり、彼らは高潔で、厳格で、公正な生活を送っていた。

詩人自らは高潔で、敬虔でなければならないが、
詩行においては、そのようことは必要とされず、
そこでは雅趣と優美が求められる。
〈カトゥッルス『カルミナ』16・5-7〉

私はカトゥッルスの見解に与する者であり、彼と同じ弁明を私のために行いたい。**すなわち、私が書いているものも、その大部分は他の人々の見解と権威に拠っているのであり、おそらく、私自身が狂っているのでなく、私は狂人たちに従っているのである。そして、私が狂っているとしても、我々はすべて、かつて狂っていたのである。私が思うに、あなたも、この者も、あの者も、そして私もまた、あるときは狂っている。すなわち、**

私は人間である。人間的なもので、私にとって無縁なものはない。

〈テレンティウス『自虐者』77〉

そして、彼［マルティアリス］が同様な誤りを責められたとき、彼が自分のために主張したことを、私もまた自らの弁護としたい。

我々のページは放縦だが、生活は高潔である。

〈『エピグラム集』1. 4. 8〉

私の生活は慎み深いが、私のムーサは戯れ好きだ。

［オウィディウス〈『悲しみの歌』2. 354〉］

しかし私は、このような弁明の必要はないと思っている。私には、プラトン〈の『パイドロス』237A〉におけるソクラテスのように、恋について語るときに目を覆うことも、パラスが、ユピテルからメルクリウスとの婚姻を勧められたときに、「**処女が婚姻を勧められて**」外衣で身を隠したように［マルティアヌス・カペッラ『メルクリウスとピロロギアの結婚』1.〈40〉］、顔を赤らめて私の目を下に落とす必要もない。私の論議は好色でも、猥褻でも、淫奔でもない。私はここに書いたものによって、フランスとイタリアの多くの作家たちが現代語によって最近著したもの、また同様に、当代のラテン語による教皇庁の作家たち、ザンキ、アソル、トスタド、ブルカルドゥスなどが著したものにように、あなた方の貞潔な耳を汚したのではない。これらの作家たちについてリヴェ［『イサゴーゲー、すなわち旧約・新約聖書概論』］は、『プリアポス詩』におけるウェルギリウスよりも、『韻律不全詩集』におけるペトロニウスよりも、『女の平和』におけるアリストパネスよりも、あるいは、（ある者［カスパル・フォン・バルト］が［ロハのスペイン語劇『ラ・セレスティナ』〈の翻訳『ポルノボスコンドンディダスカルス』の序文〉で］述べているように）、「**この種の事柄においてきわめて重い罪を犯したので、多くの才知に富んだ書物も、その猥褻さのゆえに、高潔な精神の者たちから忌避された**」、他の異教の世俗作家たちよりも好色であると非難している。本書は卑賤なものではなく、高潔で、誠実で、ほとんどの箇所は真面目で、宗教的でさえある。（［フィチーノ］が述べているように）、「我々は、愛を見出そうとする愛によって、それを探求し、それを見出した」［『プラトンの「饗宴」註解』7. 17］。だがさ

らに、私は本書において増補し、この軽々しい（もし軽々しいとすれば）論考に対して、先だつ諸版に含まれていない事柄を付け加えたのであり、この点について私は、（ある善き著作家［フォン・バルト］とともに）躊躇せずに次のように告白する。すなわち、**多くの人々がこの主題について拡大し、増加するように望んだので、彼らの要請に屈し、葛藤する私の心をなんとか追いたてて、すでに六度目となる筆を手に取り、私の研究や職業とはきわめて異なる書物を執筆するようにと心得て、私の重要な仕事の中からある時間を盗みとって、いわば慰みと気晴らしの時間とした。**

私は、再び帆を上げることを
強いられ、そして、かつて
辿った道を辿りなおす。
［ホラティウス『カルミナ』1. 34.〈3-5〉］

とはいえ、私としては、この新しい付加に対しても、おそらく新しい中傷者を欠くことはないことを知らないわけではない。

そして、私が愛の原因、誘惑、徴候、治療について、許される愛と許されない愛について、情欲自体について語る際に、（ゴドフロワが自著において恐れたように）誰かが、私の軽薄さ、淫奔さ、性急さについて責めることがないようにと、このように序文として語ることがきわめて善いと考えている。「私はそれについて、他の人々を咎めるのを非難して、それから遠ざけるために語っているだけ、それを教えこむためではなく、この英雄的な、すなわちヘラクレス的な愛の空しさと愚かさを示して、その治療を施そうとするために語っている」〈『愛について』〉。私はこのことを、他の事柄と同様に自由に論じることにしたい。

私があなた方に言おう。あなた方はさらに、何千ものことを
言うだろう。このようにして、この紙は語りつづけ、老いている。
［カトゥッルス〈『カルミナ』68. 45-46〉］

善き読者の方々は、本論考のある箇所についてあまりに軽薄であると考えたとしても、私のことを断罪し、また厳しく責め立てないでいただきたい。むしろ、「**清い者たちにとってすべては清く**」〈『テトスへの手紙』1. 15〉、アウグスタ・リウィアが正しくも述べたように、慎み深い女性にとって裸体の男性は絵画に他ならないのであり〈ディオン・カシウス『ローマ史』58. 2. 4〉、「**悪い知恵があり、悪い心があり**」〈テレンティウス『アンドロス島の女』1. 1〉、すべては取り方に拠るのだから、本論考についても好意的に考えていいただきたい。もしあなたが、本書があまりに軽薄であると譴責するのであれば、私はあなたに、リプシウスがプラウトゥスの〈作品の〉いくつかの箇所について読者におこなったような助言を呈したい。すなわち、「**それらを、セイレンの**

岩石のごときものとして通り過ぎなければならない」〈『書簡集』2. 18〉。もし、それらがあなたの気にいらないならば、それらを見逃すか、その中の善きものを悪しきものと対置し、しかし全体を拒否してはならない。というのは、マルティアリスの次の詩句、すなわち

あるものは悪しく、あるものはほどほどで、多くのものは善い、

［『エピグラム集』1. 16. 1］

を逆にして、ヒエロニムス・ヴォルフィウスとともに、私の現在の目的に適用するならば、あるものは善く、あるものは悪く、あるものはどちらでもないからである。私は彼とともにさらに、「**私は躊躇なく、ある軽く滑稽な事柄を、たとえば、劇場、街路、飲食店で流布している事柄を書き記した**」と語り、ある事柄をより飾らず、より軽く、より滑稽に挿入して、「**三美神に献げた**」。私は、以上のことについて、あらゆる人に最も善きように解釈してもらいたい。そして、スカリジェ（父）がカルダーノに「**もし何か浅薄なものを我々が楽しんでいるのであれば、不死なる神々にかけて、私はあなたに願うが、ジェロラモ・カルダーノよ、私のことを悪く取らないように**」と懇請したように、善き読者よ、私はあなたに、私のことを誤解し、私がここに書いていることを誤って受け取らないように懇願する。**ムーサたちと、三美神と、詩人たちのあらゆる神々にかけて、善き読者よ、私はあなたに願うが、私のことを悪く取らないように**。本書の主題は滑稽なものなので、私は心から哀願し、不適切なものについては許しを請い、そしてあなたに、あなたの判断を中止し、些細な誤りは見逃し、少なくとも沈黙するように願っている。だが、もしあなたのお気に召すならば、本書について褒めて、私の成功を祈ってほしい。

アレトゥーサよ、この最後の仕事を私に許してくれ。

〈ウェリギリウス『牧歌』10. 1〉

しかしながら、私は、**あなたが大胆にも競技場に入るのを欲しても、欲しなくても**、このオリュンピア競技において、ピロストラトス〈『テュアナのアポロニオスの生涯』4. 29〉におけるエレアの競技者たちとともに、この公の舞台で、思い切って私自身を晒そうと、そして、その主題ゆえに私にたまたまその機会が与えられ、現在の場が要求し、あるいは立ち現われてくるがままに、この愛の悲喜劇を、あるときは諷刺的に、あるときは喜劇的に、あるときはそれらが混合した調子で、さまざまな役を演じようと決心したのである。

第２項

愛の端緒、対象、定義、分類。

愛の範囲は広大で、歩むべき道も広範に及び、しかも茨道である。それゆえ、スカリジェ（父）がカルダーノを引用して言うように、歩き通すのもままならない［『顕教的演習』310］。同じ誹

りを受けぬよう、私はあらゆる種類の愛について、その本質、発端、相違、対象、誠実か不誠実か、美徳か悪徳か、自然な情念か病か、その力と結果、どれほど進むのかを、精査しよう。それらについては、第1部の心の乱れについての章で（ピッコローミニの考えでは「愛や嫌悪は、第一の、かつ最もよくある情念で、他の感情はすべてそこに起因し、続いて起こるから」〈『疾病普遍哲学』1.19〉であり、ニコラ・コサンによれば他のすべての感情の**第一動因で**、他の感情を引き連れて情動するものであるから）、ここでもっと幅広く、部分部分や各枝葉まで敷衍して、愛とは何か、対象によってどう変わるのか、欠陥があったり、中庸を欠いたり、行き過ぎがあったりすれば憂鬱症になるのかについて、述べようと思う。

愛は全般的に捉えれば、広義での「欲望」と定義できる。この主題について最も広範に論じたレオーネ・エブレオも『愛の対話』第3対話では同意見であるが、第1対話では、愛と欲望とを区別したうえで、欲望を用いて「愛は自発的な感情で、善きものを楽しもうとする欲望である。欲望は求め、愛は楽しむ。欲望の終わりが愛の始まり。つまり、愛の対象は存在するもの、欲望の対象は存在しないものである」と、愛を定義している。プロティノスは、「エロスが神なのかダイモンなのか、人の心の感情なのか、部分的に神、あるいは部分的にダイモンなのか」愛についてよくよく考えることは「価値ある労苦である」と言う。そして結論としては、愛は人、神、ダイモンの三者すべてに関与し、美しく真なるものへの欲望に起因するもので、「善きものを求める心の行為」と定義づける［『エネアデス』3.5「エロスについて」］。プラトンは、その激しい熱情と、あらゆる感情に対する支配性ゆえに、「大いなるダイモン」と呼び、「何か善きものをあれかしと求める」欲求であると定義している［『饗宴』〈178A〉］。フィチーノは『プラトン「饗宴」註解』で、この定義に、愛は美しく正しきものを享受する欲望である、という美しい言葉を加え、アウグスティヌスはこの一般的な定義を敷衍して、「手に入れたい、手にして楽しみたい、と求めるものを欲し、欲望で渇望し、歓びに安んずる」心の歓びとする。スカリジェ（父）は、こういった定義を非難し、「欲するものを享受すれば、欲求はなくなるから」として、欲望や欲求で定義しようとはしない。彼の定義は、「愛は我々が愛するものに結合されたり、その結合を永遠のものにしたりする欲求」であり、部分的にはレオーネ・エブレオも賛同している（『顕教的演習』301）。

次に、この愛は、その対象の違いによって変わるが、対象はいずれにせよ、善く、好ましく、美しく、麗しく、心地良い。「あらゆるものが、善きものを欲する」のは〈アリストテレスの〉『ニコマコス倫理学』〈1.1〉で学んだとおりであるが、少なくとも善いと思われるものを欲する。「**いかなる悪をあなたは欲していると私に言うのか、あなたのいかなる行為にも悪があると私は思わないが**」〈『説教集』29.4〉とはアウグスティヌスの至言。考え、望みにおいても然り。小麦にしろ、作地にしろ、木にしろ、何にせよ悪いものを欲したりはしない。召使も、馬も、息子も、友も、隣人も、妻も、善きものを欲する。この善きことから美が、美から優美さや麗しさが、多くの光が善きことの部分部分から射すごとく生じ、人はそれらを愛し、欲するようになる。それというのも、眼に麗しく悦ばしきものでなければ求めるはずがないからである。「まず見た目の麗しさ

や美しさに心楽しまなければ、愛することはない」とアリストテレスは『ニコマコス倫理学』(9. 5) で言っている。その美しい対象が変われば、愛も変わる。プロクロスが言うように「**美しいものはすべからく好ましく**」、人が愛するものは目に美しく、麗しい、少なくともそう思い、そのように評価する。「好ましさは愛の対象であり、その範囲とその極限とが知られるべきものであり、好ましさゆえに愛し、好ましさをこそ我々の心は享受したいと欲する」[ピッコローミニ『疾病普遍哲学』7. 2 & 8. 35]。この好ましさは特に善くかつ美しきものと思われる、というのも善、美、そしてその一体は切り離せないものだからである。プラトン曰く、この光と輝きゆえに驚嘆を生み、対象が美しければ美しいほど、より切望されるのである。同じくプラトンが定義するように、「美は、善から放たれる生気あふれ光り煌めく輝きであり、イデア、種、理性、影により、我々の魂を刺激し、この善により、魂と魂は結合され一つになり得る」〈『パイドロス』250C-D〉。善以外のものも、美を得て全体構成として完全となる。「部分部分の完璧な釣合、度合、順序、そして様式、この美から生じる端正さが優雅であり、それゆえに、あらゆる美しいものが優美になる」[ピッコローミニ 8. 36]。というのも、美と優雅とは見事に一つになり、「麗しくも典雅に我らの魂を捉え、強く誘うので、魂の判断を混乱させ、その区別がつかなくなる。美と優雅は荘厳で神々しい太陽からの光線や輝きのごとし」〈ピッコローミニ 8. 38〉。それは、さまざまなものから射すゆえにさまざまで、さまざまな感覚を心地よく刺激する。デ・バレスは「プラトンが**美についての**対話、『パイドロス』、『ヒッピアス』で広汎に議論しているように、美の粒子は、眼に、耳に知覚され、あるいはまた内なる魂に認識される」と述べて多くの哲学的誤謬を論破したのち、美は、目や耳、魂そのものまで悦ばせる優雅だ、と結論する〈『医学論議』3.13〉。それゆえ、デ・バレスが考えるように、耳や目、魂を悦ばせるものは、麗しくも美しく、心地よいものであるはずである。「音楽ほど耳に心地よく心を落ち着かせるものはない」。美しい邸宅、絵画、果樹園、庭園、牧草地、そして美しい鷹、美しい馬、これらは我らにとって、この上もなく好ましい。何であれ眼や耳が悦ぶものを、我々は美しく麗しいと言うのである。「快感はすべての感覚のものであるが、美と優雅とには視覚、聴覚だけが与る」。対象がさまざま異なれば、その対象はさまざまに我らの眼や耳、魂自体に働きかける。何らかの愛の誘因となり、対象の相違により異なる愛を惹き起こす。ただ一つの美は神に由来し、その美や神の愛については、聖ディオニュシオス[『神名論』4] や他の多くの教父、当代思想家たちが、『神の愛について』などといったタイトルの書や、多くの勧告の論議を著してきた。もうひとつの美は、神の被造物に由来し、身体の美、魂の美、そして徳からの美、すなわちアウグスティヌスの言葉を借りれば「**魂の眼で見る殉教者の姿**」〈『詩篇註解』32〉である。キケロに拠れば、この肉体の眼で認めれば、その美は、「**美への驚くほどの愛を掻き立て**」[『義務について』1. 4. 5]、魂を奪い去ってしまう。身体的部分から生じる美と、人間男女（とりわけ女性、古の詩人たちが、ウェヌスに仕え、その供回りをなす女神たちとして三美神を創造してきた女性）の身振り、話し方、その他もろもろの振る舞い、そして姿から生じる優雅に関しては、数限りないといえる。その呼び名も、金銭愛、貪欲、唯美、愛欲、逸楽、情欲、友愛、善意など、愛でる対象によってさまざまで、美徳もあれば、悪徳の場合

もあり、誠実なものも不誠実なものも、過剰の場合も欠乏の場合もある。それは、たとえば、英雄的愛、宗教的愛、という風に、どの場での愛かにもより、つまるところ、原因となる部位、脳か肝臓のどちらが侵されたかによって二分される、即ち**愛と友愛**に。このことは、スカリジェ（父）（『顕教的演習』301）、デ・バレス、メランヒトンが、プラトンの「**友愛**」と「**恋愛**」を根拠に是としている。プラトンでは、パウサニアスが同様に二人のウェヌスと二つの愛について語っているのである。「一人のウェヌスは年上で親はなくウラノスに由来する古のウェヌス。ゆえに天上的ウェヌスと呼ばれる。若い方のウェヌスはユピテルとディオネの娘から生まれ、いわゆるウェヌスと呼ばれている世俗的ウェヌスである」[『饗宴』〈180D-E〉]。この箇所についての注解で、フィチーノは、プラトンに従い、この二つの愛を二つのダイモンと呼んでいて、すなわち我々にとっては善き天使にも悪しき天使にもなり、常に我々の魂の周りに飛び交っているとしている。「一方は我々を天上へと引き上げ、他方は地獄へと追い落とす。一方は善きもので、我々をあの神的美の観照へと駆り立て、そのおかげで、我々は正義とあらゆる善き責務を果たし、哲学を研究するなどする。他方は卑しいもので、恥ずべきものではあるが、しかし敬意を払うべきである。というのは、実際、両方ともそれら自体の本性においては善きものだからである。すなわち、子どもの産出は、真理の発見と同様に必要なものである。ところが、それが恥ずべきものと呼ばれるのは、それが誤用され、我々の魂を他方の黙想から引き離し、より卑俗な対象へと向かわせるからである」。このようにフィチーノは〈『饗宴注解』6. 8〉述べている。聖アウグスティヌスは『神の国』第 15 巻〈第 22 章〉と『詩篇説教』第 64 章〈第 2 節〉において、実際、同様のことを主張している。「あらゆる被造物は善きものであり、そして善く、あるいは悪く愛されうる。そして、二つの都市、エルサレムとバビロンは、二つの愛を、すなわち、一方は神の愛を、他方は世俗の愛を生みだすのであり、我々はすべて、我々自身を吟味すれば即座に見いだすように、これら二つの都市の市民である」。それらのうちの一方の愛は、すべての災厄の根源であり、他方の愛はすべての善の根源である。こうして、アウグスティヌスは『カトリック教会の慣習』第 15 巻において、四つの枢要徳とは正しく構成された愛以外のなにものでもないと述べており、『神の国』第 15 巻第 22 章においては、徳のことを愛の秩序と呼んでいる。彼に従ったトマス・アクィナスは、『神学大全』第 2 の 1 部第 55 問題第 1 項、第 56 問題第 3 項、第 62 問題第 2 項において、同じことを確証して、多くの言葉によってさらに詳しく述べている。ルキアノスは同じ目的のために、彼固有の区別をおこなっている。すなわち、「一方の愛は海の中で生まれたもので、それは、海自体のように、青年たちの胸中のように変化しやすく、荒れ狂っていて、燃え盛る情欲を惹き起こす。他方の愛は天から吊り下げられた黄金の鎖であり〈ホメロス『イリアス』8. 24 参照〉、神的な狂気によって、神の似姿として造られた我々の魂を奪い、そして、我々がかつて創造された起因である、本来的で消滅することのない美を把捉するように、我々を駆り立てる」。ベロアルドは、彼のエピグラムにおいて、このことをすべて表している。

もし神的なプラトンの教説が真実であるならば、

二人のウェヌスが存在し、愛も二つである。
天上のウェヌスはいかなる親から生まれた者ではなく
純潔な愛によって聖なる者たちを結びつける。
他方のウェヌスはこの世界で遍く知られており、
神的な精神と人々の精神を繋ぎとめる、
野卑で、誘惑的で、厚顔でありながら……。

〈エピグラム「クピド」17-25〉

この愛の二つの区別に、同様にオリゲネスが『雅歌注解』において従っており、彼は、一方は神に由来し、他方はダイモン（悪しき意味において［悪魔として］理解されている）に由来すると述べている。この区分を他の多くの者たちが繰り返し、また模倣している。両方の愛（下位の区分はすべて省くとして）は、誤用され、あるいは悪化するならば、過剰さや欠如が原因で、特別な種類の憂鬱病を惹き起こす―それについては然るべき場所で示すことにする。アウグスティヌスは別の論考〈『情愛と愛の実体について』〉において、この愛の三つの区別をおこなっており、我々はそれを善くも悪しくも用いることができる。「神、我々の隣人、そして世界が存在している、すなわち、我々の上方にいる神、我々の傍らにいる我々の隣人、そして我々の下方にある世界が存在している。我々の希求の過程において、神は三つのものを、世界は一つのものを、我々の隣人は二つのものをもっている。〈そして、愛は希求の中に秩序づけられている。〉愛は〈希求を通じて〉、神から、神とともに、そして神に向かって〈秩序づけられて〉働いている。『神から』というのは、我々の愛が神から受け取る場合であり、それゆえに、神を愛することになる。『神とともに』というのは、我々の愛が神の意志にまったく反しない場合である。『神に向かって』というのは、我々の愛が神の中で休息し、そして自らを休めようとする場合である。我々の隣人に対する我々の愛は、その隣人から進みでて、隣人ともに働くかもしれないが、隣人に向かってはいない。『隣人から』というのは、我々が隣人の善き安寧と幸福を喜ぶ場合である。『隣人とともに』というのは、我々が神への道において、隣人を我々の友にして同伴者であることを望む場合である。『隣人に向かってではなく』というのは、人類の中には救済も希望も信頼も存在しないからである。我々の愛が『世界から』来るというのは、我々が創造主を彼の被造物の内に称讃し始める場合である。［他方、我々の愛が希求の中に秩序づけられずに］それが『世界とともに』働くのは、あらゆる一時的なものの移り易さに従って、それが逆境の中で挫ける、あるいは繁栄の中で称揚され過ぎる場合である。それが『世界に向かって』というのは、それが空しい愉悦や研鑽の中に自らを置いている場合である」。私は、このような多くの区分を、また下位区分を繰り返すこともできるだろうが、しかし、（スカリジェ（父）が『顕教的演習』501番でカルダーノに反駁しているように）「私が不潔な燃え盛る欲情と純粋で神的な愛を混同しない」ために、レオーネ・エブレオの『愛の対話』の、ソフィアとフィロンの間の第二対話における正確な区別に従うことにしたい。そこで彼は、「自然本性的愛、感覚的愛、理性的愛について」語り、それ

ぞれを別々に論じている。自然本性的愛、あるいは嫌悪とは、共感、あるいは反感のことであり、それらは魂のある被造物に、そして魂のない被造物に、四元素、金属、石に見いだされ、石が中心に向かうように、**重たいものは下方に向かい**、火は上方に、河川は海に向かう。太陽、月、星辰は常に円運動をしており、完全性への愛によって、**自然の責務を遂行することを愛する**［フォンセカ『愛の闘技場』1、アウグスティヌス『神の国』5に拠る］。たしかに、この愛は、魂のない被造物において明白であり、もし、愛のゆえでなければ、いかにして天然磁石は鉄を自らに惹き寄せるだろうか。黒玉は籾殻を惹き寄せるのだろうか。大地は驟雨を切望するのだろうか。聖ヒエロニムスが結論しているように、被造物の中に、「**何ものをも愛さないようなもの**」〈ヒエロニムス『書簡集』22.17〉は見出されなく、何らか愛の感情を抱くことのない幹や石は存在しない。このことは植物と薬草において際立っており、そしてとりわけ、野菜において観察される。たとえば、木蔦と楡の間には大きな共感が存在し、木蔦とキャベツの間にも、木蔦とオリーヴの間にも存在する。しかし、「**処女はバッコスを避ける**」［アルチャート〈『エンブレム集』24〉］。木蔦と月桂樹の間には大きな反感が存在し、木蔦は月桂樹を愛さず、「その香りを嫌い、もし近くで成長するとそれを破滅させる」［デッラ・ポルタ『ヴィッラ』8.19］。ゴボウとレンズ豆は互いに耐えることができない。他方、オリーヴと銀梅花は、近くで成長するならば、根と枝を互いに絡ませる［ミザルドゥス『百の秘密』］。このことについて詳しくは、ピッコローミニの『慣習についての普遍哲学』第7巻第1章、クレシェンツィの『農業のあらゆる部門について』第5巻、デッラ・ポルタの『自然魔術』第1巻の「植物と諸元素の嫌悪と共感につて」の章、フラカストロの『諸事物の共感と反感について』を読まれたい。諸惑星の愛と嫌悪については、あらゆる占星術師を参照されたい。レオーネ・エブレオは多くの信じがたい理由を述べて、しかもそれらを道徳的に解釈している。

感覚的愛は、野獣の愛。これについても、先と同じくエブレオが、次のような原因を挙げている（『愛の対話』第2対話）。雌雄が互いを愛するのは、まず第一に、生殖行為において得る快楽のため。第二に、種の保存のため、子どもをもつことへの欲望のため。第三に、同種であることの相互合意のため。「**豚は豚に、犬は犬に、牛は牛に、驢馬は驢馬に、一番美しいと見られる**」とエピカルモスは考え、ディオゲニアノスの格言によれば、

鴉はどこでも鴉の傍にとまる。
〈エラスムス『格言集』1.2.23〉

同じものどうし、一緒にいるのを好むのである。

蟻は蟻に、蝉は蝉と仲が良い。
［テオクリトス『牧歌』9］

同じ色の鳥も群れをなす。第四に、習わし、慣習から、また懇意を示すため。犬をライオンや熊と一緒に訓練すると、その本性に反して、愛し合うようになるようなものである。鷹、犬、馬は、ご主人や飼い主を愛する。それについては、多くの逸話を挙げることはできるが、それよりジルの『動物誌』（3巻、14章）や、リプシウスの犬や馬についての二つの書簡、アウリウス・ゲッリウスなどを参照された方が良かろう。第五に、子育てのため。雌犬が仔山羊を、雌鶏が家鴨の雛を、イワヒバリがカッコウを育てるように。

三つ目の愛は、エブレオの言葉を借りれば「**認識の愛**」、すなわち理性的愛、**知性的愛**で、人間に特有のもので、特にこの愛について力を入れて述べたい。この愛は、神、天使、人間にみられる。神は愛そのもの、愛の泉、愛の徒で、プラトンが称するとおりである〈『饗宴』198A〉。平和の僕、愛と平和の神。すべての人と平和を保つべし、そうすれば神は汝と共にある。

――オリュンポスを敬う者は誰でも
世界と神とを自らに従わせる者。
［マンテュアヌス〈『牧歌』〉］

ジェルソンの言葉によれば「この愛により、我々は天国を買い」、神の王国を買う。聖霊は父の愛でもあり御子の愛でもあり（『ヨハネ福音書』3. 35, 5. 20, 14. 31）、他の二者についても同じことが言えるゆえ、この愛は、三位一体そのもののいずれでもあり、天地創造において与えられた被造物に対しての愛でもある。**愛が世界を造った**、愛が**世界の魂**たる国々を建てた、技芸、学問を創設し、善きものすべてを創った。愛は我々を徳へ人間性へと誘い、結び付け、それを強めた。地上に平和を、海には静謐さを、風その他の四元素には歓喜を維持し、恐れ、怒り、粗野を放逐して、**善から善へと循環**をなす。我が国の詩人たちが、円、四角などのシンボル、インプレーザ、エンブレムで、象徴的に示すように、愛はすべての行動の始点であり終点、有能で効果的な誘因なのであるから。

もし、物事の初めと終わりとは何なのかと尋ねるのなら、
そんなことは辞めるがいい、ただ一つ愛だけが唯一の原因なのだから。
〈カメラリウス『シンボルとエンブレム』2. 102r〉

エブレオ曰く、愛は世界を創り、そののち「神は世界をとても愛したゆえ、ただ一人の御子を与え」（『ヨハネ福音書』3. 16）世界を贖った。「見よ、我らが神の子と呼ばれるために、何という愛を父なる神が我らに示したのか」（『ヨハネの手紙I』3. 1）。慈愛に満ちた摂理で、世界を、並べてすべてを、選ばれし聖人を、特に教会を守るに際し、神は眼の瞳のごとく大切にし〈『申命記』32. 10〉、惜しみなく愛し（『ホセア書』14. 5）、心から尊敬する。「**人は自らに対してより、神々に対しての方がちかしい**」［ユウェナリス〈『諷刺詩集』10. 35〉］。それも、我々はこのうえもな

く下劣で卑しいものだから、我々の正しさゆえでも、長所や美点ゆえでもなく、神の無比の愛と善ゆえ、神の本性ゆえなのである。これこそが、ホメロスの黄金の鎖、天から地へと降ろされ、すべての被造物が繋がれて創造主に拠る鎖。神はすべてを創り、「それは善かった」、善きゆえに神はそれを愛する、とモーセも言っている［『創世記』1.〈31〉］。

天使と生ける魂との愛は、相互間では双方向のもので、我ら人間、また神を愛する者すべてにとっては教会の戦士である。太陽光線が天の玉座から地上を照らすように、天使や生ける魂は、その井戸から意志を我らに照り返す。「**人の救済には、迅速な推進と絶えざる援助者**」［コサン〈『聖なる雄弁と人の雄弁との比較』〉］と、悔悟する者には天に歓びがあり、天使と生ける魂は我らのために祈る。我らの善を見守る**浄らかなる守護霊、**

そこでは、慈愛、甘美なる欲望、
歓び、かつまた神と結ぼれた愛が統べる。
［テオドレト〈『ギリシア疾病治療法』〉］

人の男性に特有の愛は、下位区分の三番目のもので、次の議論の主題である。

第 2 節第 1 項
男性の愛、対象によりさまざま、有益、快適、誠実と変わる愛。

デ・バレスは、男性に見られるこの愛を「欲望と理性、両方の感情」（『医学哲学論議』第 3 巻、議論 13）と称している。理性の感情は脳に宿り、欲望の感情は肝臓に宿る。（プラトン〈『ティマイオス』71A-B〉等から引用して、先に述べたとおり）心はその両方に左右され、さまざまな感情に合致してさまざまな方向に運ばれる。たいていの場合、感覚的能力が理性に勝り、野獣のように、魂は欺かれ、知解力は囚われてしまう。「心はさまざまな方向に行く。ときに楽しく、時に悲しい。愛からは希望、恐れ、嫉妬、怒り、絶望が生じる」のである。この男性の愛には種々あり、徳、知恵、雄弁、利益、冨、金銭、名声、栄誉、外見といった、心誘われる対象物によってさまざまに変化する。レオーネ・エブレオは『愛の対話』第一対話で、これらを**有益なるもの、快適なるもの、誠実なるもの**、の三種に集約している（これはおそらくアリストテレス『ニコマコス倫理学』8 に基づいている）。エブレオの詳論に拠れば、美しいもの、麗しいものが、それぞれ三種の愛に属するものであり、いずれにしても求められるのである。「健康、冨、名誉等々は有益なるものに属し、それへの欲は、愛というよりむしろ野心、欲望、強欲ということになる」。友人、子ども、女性への愛、これらはすべて心嬉しく、快適なもので、快適なるものに属する。誠実なるものには美徳、叡智への愛があり、先の二つの愛に優るものである。道徳的徳は有益なるものや快適なるものと、知的徳は誠実なるものと深くかかわっている［ピッコローミニ『疾病普遍哲学』第 7 巻第 1 章］。聖アウグスティヌスは「有益なるものを世俗的愛、快適なるものを肉体的愛、誠実なるものを精神的愛」［『友愛について』］と称する。「これら三者から、慈愛、友

情、そして神や隣人を敬う真なる愛、が生じる」。これらの一つ一つについて少しばかり詳しく述べ、いかなる類の憂鬱症を来すのかを示そう。

愛を醸し、男性の魂を誑かす、すべての心惑わす見目麗しきもののうち、有益なるものは何よりも心そそり、抗えず、有益なるものを誇示する。健康は実に大切なもので、健康を回復したり維持したりするために、我々はいかなる苦難をも耐え忍び、苦い薬も服用し、心おきなく所有物を手放す。ある男を健康へと戻せば、その人の財布は口をあけてそこにあり、その人はあなたに対して気前よく、感謝し、眼を向ける。しかし、その男に富や名声を与えてみよ、黄金やその他何でも男が喜ぶ益を与えてみよ、そうすれば彼の感情を支配し、永久に心、手、生命、なんでもすべてを汝に捧げさせることとなる。あなたは彼の大切な愛する友、寛大なる善き主人、いわばマエケーナス［古代ローマの政治家。ウェルギリウス、ホラティウスなど文人のパトロン］。彼は、いかなる義務においても、いとも忠実で思い深く、恩義を感謝しているあなたの奴隷、あなたの臣下。天使が話したとか、益をもたらす幸あるときだとか、彼に益あることを話してみよ、そうすれば彼はあなたの被造物、あなたは彼の造物主、彼はあなたを抱擁しあなたを崇める。彼は永遠にあなたのものである。いかなる磁石も、有用なるものほど人を惹きつけはしない。金ほど麗しきものはなく、良き巡り合わせほど男の心を捉えるものはない［ビベス『霊魂について』〈3〉］。もの惜しみなさや金離れの良さは身体も心も支配するのである。

贈り物が人をも神をも宥め、
ユピテルさえ、贈り物には勝てぬ、と私は思う。
〈オウィディウス『恋愛術』3. 653-54〉

他のもののなかでは黄金は最も心地よき愛の対象、甘美な光、美しい輝きがある。「**我々は太陽よりも黄金を好もしいと考える**」とアウグスティヌスも言うように、我々は太陽よりも黄金を見たいと思う。手に入れわがものとするに、楽しく嬉しく、そのためにはどんな苦役も耐えがたき苦痛も受け容れ、卑しき仕事にも耐える。辛い軽蔑や嘲り、長い旅路、重い荷、すべてが黄金を得るためとあらば軽く容易なものとなる。「**我が家で、蔵に黄金を見ればすぐさま、これで良しと嬉しくなる**」〈ホラティウス『諷刺詩集』1. 1. 66-67〉。黄金を見れば元気回復、心は躍る。かのバビロニアの衣服や金の延べ棒にアカンが天幕で経験したように［『ヨシュア記』7］。それを見聞きすれば、魂は欲望の炎に燃えるのである。金は、男を地球の裏側にまで走らせ、家にじっといて居候と化させたり、嘘を言ったり、追従に走ったり、身を売ったり、虚偽の証言をしたりさせる。わが身を危険に曝したり、王を殺害したり、親殺しに及んだり、金を手に入れるためには魂をも破滅させる。アペッレスやペイディアスなど愛にどっぷりつかった画家が描き得たいかなるギリシア絵画にもまして「**金塊はより麗しい**」［ペトロニウス〈『サテュリコン』88〉］は至言。

第一の祈りは、どの社でもよく知られているが、

富が増えるべし、というもの。

［ユウェナリス〈『諷刺詩集』10. 23-24〉］

我らが働き、学び、努め、誓い、祈り、希う、すべては黄金を得るため、いかにそれを獲得するかのためのもの。

これは、全世界が奴隷とひれ伏すお方、
世界に権勢ふるう女神にして運命の支配者、金銭。

［ヨハネス・セクンドゥス『詩華集』1. 32-33］

金銭は、我々が崇め祀る偉大なる女神、我らが欲望のただ一つの対象。手に入れれば永久に、三倍幸せ、王侯、領主などに。失えば、気力なく、気重で、気落ちし、不満、惨め、自暴自棄となり、気狂いとなる。我々の状況や**幸福**は、財産の干満で、引いたり流れたり、しかも、財を為したり富んだりすれば、愛され尊敬されもする。幸福な状況は富の続く限りで、富が失せ、財がなくなれば、友情ともお別れ。あまたの物資、歓呼、見返りが望めるうちは、友も大勢。そんな時には、まるで死体に群がる鴉のように、友は齧りついてでも寄って来る。でも、いったん物がなくなれば、彼らの愛の灯は消え、あなた方は侮られ、蔑まれ、憎まれ、傷つけられることになるのである。ルキアノスの描いたティモンは、豊かに暮らしていたときは、ギリシア随一の注目の的、ただ一人称讃された。ティモン以外誰が称讃され得ようか。誰もが愛し、尊び、称え、誰もが仕えたがり、親戚になりたがった。だが、金が使い果たされ、財産がなくなれば、みなティモンの許を去り、彼はこれほど醜く、見苦しく、不愉快で、馬鹿げたものはないほどに突然成り下がり、自死するための縄を買うための１ペニー硬貨を施され、誰からも忘れ去られた［『ティモン、すなわち人間嫌い』］。

これが世間の通常の性。物が我らの感情を一から十まで左右する。我々は幸運で金持ちで、栄えている人たち、その人たちと互いに親しくお付き合いし、対等に礼を尽くしあうことができ、善きこと、利すること、益あることにありつける人たちを好む。一方、貧しい人、惨めな人、その人からは損や不利益しか蒙らない人たちは憎み嫌う。目下、自分にとって親しく大切であった人たち、好意をもって長く付き合ってきた友や隣人、親戚、仲間とは、古に多くのゲリュオン［ヘラクレスに殺された三体三頭の怪物］たちが何年も暮らしたかのごとく、絶えず互いにできるだけ満足させ喜ばせようと、招待し、歓待し、娯遊に誘い、尽力しに身を尽くして、交わり暮らしてきた。その人たちのために、駆け回り、奔走し、身を粉にし、その人たちについて、心から、敬意を払って言葉を尽くし、その人たちに、大げさな称号、壮大な讃辞―いとも卓越せる、いとも気高き、有徳なる、賢明なる、厳粛なる、博学なる、勇猛果敢なるなどといった桁外れに壮大な類の―をなんでも与えてきたものである。しかし、もし、何らかの意見の食い違い、侵害が起こり、侮辱があったなら、また財産の一部が差し押さえられたり、地所が訴訟に持ち込まれたり、

訴訟で邪魔だてされたり、財産をせびられたりしたら、たちまち、その人たちを嫌悪し、見下げるようになり、親戚、血縁であれ、旧知の仲であれ、変わることはない。「**無花果の木が肝臓を破壊して生え出てくる**」［ペルシウス〈『諷刺詩集』1. 25〉］のである。美味し食べ物、例えば熊たちのなかにぶら下がっている蜜蜂の巣のように、黄金の林檎は、抗えない力ですべての者を群らがらせる。父と息子、兄と妹、親族同士が相争い、いかなる悪意が決定的な憎悪を生み出すかを熟視する。必ずやそういうことは起こり、「**恐ろしく、忌まわしく、有害で、残酷、野蛮な**」〈セネカ『狂えるヘラクレス』32〉、傷つけあい、復讐心、いかに相手を痛めつけるか、そんなことに我々はみな腐心することになる。たとえ悦びが中断されても、耐えることができ、肉体が傷つけられても我慢して和解できる。しかし、財産に手を付けられたとあっては、どうしても我慢ならない。優美だったものも醜悪に、カリスもハルピュイアに、親しき挨拶も辛辣な呪いの言葉となり、互いの歓待も悪辣な陰謀に、採掘は採掘返しに、善意の言葉も諷刺や罵詈雑言になり、互いに罵り合ってしまう。卑劣な悪党、悪魔、怪物、毛虫、毒蛇、武骨な田舎者などと、相手の不完全なところばかりが目につくのである。

その女性は上半身は美しいが、下半身は魚と化す。

〈ホラティウス『詩論』4〉

情景は、一瞬にして変わり、愛は憎悪に、歓びは憂鬱になる。我々は、往々にして、財と金とに、強烈に心傾け、感情も執着する。それらへの欲望は度を越して貪欲となり、先に［第1巻第2章第3節第12項で］述べたように、野望が魂を専制的に支配する。財や金がなければ、あたかも奔放に、倹約せず。浪費し、道楽に明け暮れて、財も富も空費、消費して、果てに乞食となり憂鬱症になる男のごとく苦しむ。そんなときは卑賤の者になり果て、「邪宗の徒より劣悪、家族を養うこともできない」［『テモテへの手紙Ⅰ』5. 8］。

第2項

愛の快適な対象。

愛の快適な対象は無限であり、それらには生命を有するものも、生命を有しないものもある。生命を有しないものは国、州、塔、町、都市であり、彼［リプシウス］が述べているように、「**実際に見ていなくても、我々は描写によって、きわめて美しい島を見る**」［『書簡集』1. 24］。太陽は、テッサリアのテンペ谷、果樹園、庭園、快適な遊歩道、木立、泉などよりも美しい都市を見たことがなかった［リーランド］。天空それ自体は美しいことも醜いこともあるが、美しい建物、美しい絵画、巧みな技術によって念入りにつくられた、好奇心をそそる作品と衣服は、驚嘆すべき輝きをもたらし、我々はそれらを、「**あたかも子どもたちが孔雀に対するように**」〈ユウェナリス『諷刺詩集』7. 32〉称讃し、凝視する。美しい犬、美しい馬と鷹なども同様である。「**テッサリア人は仔馬を愛し、エジプト人は仔牛を愛し、ラケダイモニオン人は仔犬を愛する**」［テュロスの

マクシモス『説教』9]。我々が愛するような事物は、我々の視覚にはきわめて優雅なもので、我々が受け容れやすいものであり、そして、グアイネーリオが指摘しているように、他のものも何であれ、それが過剰に、あるいは過度に愛されるならば、このような愛情を惹き起こす。これらの事物はそれ自体が快適さをもたらす、善きものであり、特別の装飾を具え、必要なもの、適切なもので、所有するにふさわしいものだが、しかし、もし我々が節度を欠いた目を注いで、それらに過度に耽溺するならば、この快楽は苦痛へと変わり、我々に多くの悲嘆と不満足をもたらし、我々を最終的に崩壊へと導き、結果として、憂鬱症を惹き起こすだろう。多くの者たちが、勝負事、鷹狩り、狩猟などの無益な快楽の魅惑的な娯楽によって心を奪われており、私がすでに述べたように［第1部第2章第3節］、ある者たちはオリュンピア競技において栄誉を授けられたいとか、戦場において騎士に任ぜられたいとか、名声への過度の欲望をもっており、彼らはこの種のことが原因で自滅するのである。好色な者は自らの愛する女性に身を捧げ、大食漢は自らの好物に専心して、味覚を喜ばすために皿から皿へと限りなく移り行く。エピクロスの徒は自らのさまざまな快楽に専心し、そして、迷信深い者は自らの偶像に専心し、トルコ人たちが官能的な楽園のことを確信して想像し、満足しているように、未来の歓喜に期待を膨らませている。このように、いくつもの快適な対象が、さまざまな人々に対して、さまざまに働きかけている。しかし、最も美しい対象と誘惑は人間たち自身から生じるものであり、それらはきわめて頻繁に彼らを虜にし、惹き寄せて、限度を超えて、お互いに、多くの点において耽溺させる。それは第一に、ある人々が想像しているように、星辰の秘密の力によって生じる（「**いかなる星辰が私をあなたに差し向けるのか**」〈ペルシウス『諷刺詩集』5.51]〉）。不思議なことに、彼らは、ある者に耽溺し、またその者を嫌うが、その理由を述べることはできない。「**私はおまえが好きではない、サビディアスよ〈なぜかは分からないが〉**」［マルティアリス『エピグラム集』1.32.1]。アレクサンドロスはヘペスティオンを、ハドリアヌスはアンティヌスを、ネロはスポルスを讃えた。この原因を医師たちは、彼らの気質に帰しており、占星術師たちは、これらの人々の出生時に上昇点にある司星の三分星位と六分星位に、あるいは衝に、また惑星間の愛と嫌悪に帰している。チコーニャ［『魔術大要』2.3］は、スピリトゥスの協和と不和に帰している。しかし、ほとんどの人々は、外面的な魅力に帰している。楽しい仲間はあらゆる人間から歓迎され、受け容れられる。それゆえに、ゴメス［『機知について』3］が述べているように、諸侯と偉大な人々は、彼らの宮廷に、通常は、道化師たちと役者たちを招き入れるのである。しかし、「**類は友を呼ぶ**」〈キケロ『老年について』3〉のであり、ほとんどの人間を解きえない絆によって結びつけているのは、この習慣の類似性である。あたかも彼らは同じ研鑽と同じ娯楽に耽っており、互いで仲間であることを喜んでいるかのようである。「一つの羽根をもつ鳥たちは、ともに集まるものだ」。もし彼らが異なる性向の持ち主で、習慣も相反しているならば、和睦することはほとんどありえない。第二に、愛想のよさ、慣習、そして親密さは、多くの場合に人間の本性を変えるだろう［ビベス『魂について』]。その場合には、さまざまな習性が見出されるにもかかわらず、同郷人、学友、同僚であるかのごとく、あるいは戦友であったかのごとく、そして、悲嘆において（「**不幸における辛い**

連携が異なる性格の人々を結びつける」［テオドレ・プロドロムス『愛の歌』3］）、類似性において、あるいはこのような偶然の機会において同胞であったごとく、である。しかしながら、彼らが自分たちの間で一致しえないときには、いがのように一緒に結びついて、第三のものに対抗するが、何か途絶や死が生じたのちには、敵意は消え去る。

妬みは生ある者たちにおいて育まれ、死ののちは鎮まる。

〈オウィディウス『恋の歌』1. 15. 39〉

あるいは、異国の土地においては、

そして、憎しみは消え、そして、死が嘆かわしい怒りを覆った。

〈スタティウス『テーバイス』12. 157〉

愛と嫌悪の第三の原因は、相互的な好意、**受け入れられた恩恵**であろう。ある者を褒め、彼に親切に応対し、争いでは彼の肩をもち、不幸のさいに彼を慰めるならば、あなたは彼を常に味方にもつだろう。反対のことをおこなうならば、間違いなく、彼は永遠の敵となるだろう。一般に知られてはいないが、ショッペがスカリジェとカゾボーンにおこなったのと同様に、互いについて称讃し、そして軽蔑してみなさい。「**騾馬は騾馬を引っ掻く**」。彼によって、**まさにスカリジェが、讃辞を、形容辞を、これ以上の称讃を捧げられてはいないだろうか。すなわち、知恵の祭司、文芸の永遠の独裁官、それらの華、ヨーロッパの奇跡よ、**高貴な**スカリジェよ、才知の信じがたき卓越さよ、あらゆる点で、人間よりもむしろ神々に比類すべき者よ、彼の書物を、天から降ろされた黄金の盾として我々は、膝を屈して崇敬しよう、云々。**しかし、彼らが変わり始めると、ショッペの著作『ボルドーネ一族について』や他の諷刺的雑言が証しているように、スカリジェほど馬鹿馬鹿しく、恥ずべき、卑しい者はいないことになる。『イビス』におけるオウィディウスも、アルキロクスすらも、これほど冷酷ではなかった。愛の別の深い絆、すなわち原因は血縁関係であり、両親は自らの子どもたちに、子どもたちは自らの両親に優しく、兄弟たちと姉妹たち、あらゆる種類の親族も優しく、それは、雌鶏が雛鳥に優しく、全体がひとつの結び目となるのと同様である。あらゆる鴉は自分自身の雛をもっとも愛らしく思っている。この種の、多くの忘れられない例が存在している。もしそうでなかったら、奇怪なことである。「母は自分の子どものことを忘れることができない」［『イザヤ書』49.〈15〉］。こうしてソロモンは、〈子どもの〉真の母親を発見した〈『列王紀上』3. 16-28〉。両親の愛は隠すことができず、それが先祖伝来なのは当然のことである。そして、この種の事柄において非人間的な者たちは、彼らが吸っている空気にも、四元素にも値しない。しかし我々は、この種の事柄において、多くの非自然本性的な例も所有しており、たとえば、心の頑なな両親、不従順な子ども、不和の兄弟であり、それはきわめて普通のことである。親類の愛は冷たくなり、（諺にあるように）「**親類が増えると、友だちは少な**

くなる」。もしあなたの暮らしぶりが善く、あなたが、彼らの善意に対して報いて、「**一つ一つにお返しする**」〈テレンティウス『宦官』3. 1. 445〉ことができるならば、そこには相互的な行き来が存在するだろうが、さもなければ、あなたは重荷となり、彼らによって誰よりも激しく憎まれる者となる。人間と人間を結びつける最後の対象は、姿の外見であり、男性が女性を淫らな目で見るように、美それ自体である。それは、とりわけ、「英雄的な」、あるいは愛の憂鬱症と名づけられる。その他の愛は（ピッコローミニ［〈『慣習についての普遍哲学』〉1・22］が述べているように）、葡萄酒への愛、黄金への愛など、ある限定をともなって呼ばれる。しかし、女性への愛はより支配して強制力を発揮し、その影響を受ける器官は肝臓である。そして、この愛はより詳しい説明に値するのであり、次の章において詳述することにしたい。

＊太字表記は原文がラテン語、ギリシア語であることを示す。
＊原注には、典拠の該当箇所と、テクストの引用が見出される。典拠は［　　］内に示し、テクストは訳出に反映し、必要と思われる部分は［　　］に補った。
＊その他の補注や訳出の補完は〈　　〉に示した。

テクスト

（底本）Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*（*Oxford English Text*）（6 Vols.）. Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

（参考）Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*（Facsimile）（*The English Experience*）. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

既訳

「第１部 第１章 第１節」　『京都府立大学学術報告　人文・社会』　第 59 号　2007　所収
「第１部 第１章 第２、３節」　『京都府立大学学術報告　人文・社会』　第 60 号　2008　所収
「第１部 第２章 第１節」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 61 号　2009　所収
「第１部 第２章 第２節」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 62 号　2010　所収
「第１部 第２章 第３節 第 1-10 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 63 号　2011　所収
「第１部 第２章 第３節 第 11-14 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 64 号　2012　所収
「第１部 第２章 第３節 第 15 節」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 65 号　2013　所収
「第１部 第２章 第４節 第 1-6 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 66 号　2014　所収
「第１部 第２章 第４節 第７項－第５節、第３章 第１節　第１・２項」
『京都府立大学学術報告　人文』　第 67 号　2015　所収
「第１部 第３章 第１節 第３・４項－第３節、第４章」
『京都府立大学学術報告　人文』　第 68 号　2016　所収

（2017年10月2日受理）
（おかむら　まきこ　文学部　共同研究員）
（いとう　ひろあき　専修大学　教授）